

花形スタア半生記

泣き笑い銀幕修行

鶴田浩二

めきめき売出した松竹の二枚目スタア鶴田浩二さんのスタアになるまでの苦心談。  
学校が嫌いで十二の時から撮影所にはいり、子役から銀幕修業

### (一) 我が幼年時代

本名は小野榮一、大正十三年十二月六日、浜松市寺島町三〇六に生まれました。体重は八百五十匁、よく眠りよく泣く美男子だったそうです。やがて、幼稚園、小学校と進む頃には、舌足らずで、お人形のように可愛かったとか。これなら今でも証明する人がちゃんといるので、嘘ではないでしょう。その証拠には、現在も舌足らずで、台詞が甘くなって困っていますからね。

しかし、私の記憶には、自分の事より、母の美しかったことが印象深く残っています。父兄会なんかあって、母が学校へ現われるとその美しさは際立ち、子供心にもどんなにかしあわせでした。学校の成績など余り良くなかった私にとって、唯一の誇りでもあれば、自慢の種でもあったのです。

もう一つ、いつもお昼になると弁当を届けに来てくれる近所の麻雀屋の娘さんが、これまた実に美しく、それもうれしかったものです。学校は龍禅寺小学校でしたが、その頃、弁当を女中に届けさすことが流行っていました。部屋数十八もありながら、四つ程しか使っていない程、当時私の家は左前でしたから、とても女中どころではなく、だから母は、娘さんに頼んで運ばせていたのです。長男の私は万事この調子で甘やかされてきました。

### (二) チンピラ俳優

陸軍造兵廠へ勤めていた父の転勤で、一家は大阪の旭区大宮町へ移りましたが、その頃から私は学校が嫌いで、役者になるんだと云い、とうとう西の宮にいた叔父を通じて、彼の親友で、当時高田浩吉さんの支配人だった木曾十三郎さんに頼んで、撮影所入りをもくろんだのです。両親はそれについて一言も反対しませんでした。この時十二歳だったので、ソートーなものです。

当時高田さんは下加茂では、阪東好太郎（本間謙太郎）さんと共に大スターで、私はそのお弟子さんという名目で、撮影所の一員になりました。芸名は、高田先生に貰った鶴田（先生の紋が鶴だからでしょう）と、本名の榮一を使いました。

下加茂生活はまる一年で、その間に三、四本の仕事をしましたが重なるものは、「会津の娘達」という白虎隊の映画でした。本郷秀雄さん、伏見信子さんが共演され、私の役は、十六歳の家老の息子でなかなかの大役でした。撮影は殆ど太秦の裏山を使っただけで、飯盛山の大オープンセットで行われ、何しろセットの入口には氷柱が下がっているという一月か二月の厳寒のさ中に、剣道着一枚で長詩問の撮影でしたから、その寒いことと云ったらお話になりません。皆んな風邪にやられてたおれるしまつ、私もいよいよ最後のクライマックス

シーンで身に数カ所の傷を受け、本郷秀雄さんの背に負われながら死んでゆくという悲壮な場面で、おまけに雨が降るところなので、一日中頭から水をかぶったのだからたまりません、撮影が終ると同時にひどい発熱でした。診断の結果はジフテリアということで、すぐさま京都の市立病院へ入院しました。

### (三) 禍い転じて福となる

入院生活は二た月も続きました。楽しみといえば、花やお菓子と共に枕元へ届けられる本を、看護婦さんに読んでもらうことでしたが、私には彼女らが、どんなに美しく清らかに感じられたことか。そして彼女らの唇を通して語られる「モンテクリスト伯」や「ロビンソン漂流記」の何と夢多く素晴しかったことか。その感動と共に、今まで知らなかった読書慾がむくむく私の中でもち上り、その喜びを知ると同時に、一方では、学業を捨て、映画に走ったことへの後悔が、なんともいえないさびしさとなって、私を大きな不安に誘うのでした。

「看護婦さん、僕は勉強しなくちゃいけないねえ、映画なんかやめなくちゃいけないでしょう？ 僕に教えて下さい……」

「そうですとも、坊ちゃんはまだ小さいのだから、映画のお仕事なんかより、先ず自分をよく育てることを考えなければ。もっとむずかしいいろいろな本がわかるようになって下さいね」天使の声のような気がしました

退院と同時にこの気持ちを高田先生に打ち明け、一年ぶりに大阪の家へ帰って、早速中学校入試の準備にとりかゝりました。小学校ですら成績がよくなかった上に、一年の俳優生活というブランク(空白)があるのですから、大変です。ともかく梅田の此花商業に入学し、かくて私の中学生生活がはじまりました。

思えばジフテリアが、私の一生に、こうしたプラスをもたらしてくれたのです。

### (四) 天晴れ中学生！

ところがその中学生生活たるや天晴れなものでした。成績は相変わらず劣等生ながら、スポーツと喧嘩では随分ハデに鳴らしたものです。当時はいずこも卓球熱が盛んで私も二年生の時から卓球部に入り各地に転戦しました。

その頃父は、浅野重工業の工務課長として郷里の浜松へ帰ることになったので、僕は大阪に残って下宿し、近くの永楽卓球クラブ所属となり、尚学校では部の主将として、一日中卓球のためにだけ呼吸(いき)をしていました。

その甲斐あって、昭和十六年、中之島公会堂に於ける明治神宮予選、大阪府新人大会にいずれも優勝し、翌年の神宮大会へ出場する栄誉を与えられましたが、無念にも、当時の官僚の偏見から、卓球が国体から除外された為、すべての夢は破れました。

お次は喧嘩です。私はどちらかと云えば硬派でしたし、体力もよかったので、いつも中学生間の勢力争いの中心となり、野球で名高い浪花商業や北洋商業、尼ヶ崎中学の生徒を相手に、華々しくわたりあったものです。戦果は常に我が方に勝利でした。

ところが一つだけ、苦い経験があります。三年生の夏休みに帰省中のこと、パリッとし

た緋の着流しかなんかで映画館へ入ったものです。すると四人組のアンチャン達から「おう、顔を借しな」とばかりからまれ、よせばいゝのに「何が何だい、俺を知らないな」といったあんばいにからみ返えし、散々ノサれたあげくのはては近くの川へモロに投げ込まれてしまいました。

万時この調子でしたから、卒業の時はビリから二番目という、天晴れな戦果でした。

### (五) ロマンスの花咲きそめて

関西大学専門部商科に進みましたが、こゝでもたゞ何となく学生生活を送っていたというのが真実です。しかし、このあたりで、そろそろロマンスが花開いてくるのです。おゝ初恋よ……

中学から関大へ入学する間のことです。卓球の道具を買いつけの店の女店員が、嫁入りのため郷里明石へ帰るのを送って行き、須磨明石の浦の夕月を眺めながら海岸の砂浜を手を握り合って歩きました。

「僕のこと、それから今日の、この浜辺のこと、君は忘れないでいてくれるかしら——」

「忘れるものですか、いつまでも……。あなたこそ、おぼえていて下さいね」

「わかってるとも……」なんと、絵のような一齣ではありませんか。但し相手は四つか五つ年上でした。たゞそれだけの思い出しかないのですから、初恋といっても、実にあつけないものです。

ところで、つい先だつてのことです。「栄光への道」で、大阪へロケした或る日、散歩中の街角で、赤ん坊をおんぶして歩いてくるおかみさんと行きあいました。買物籠をブラ下げ、下駄をペタペタ鳴らし、さもこすそうに世馴れた、しかもブタのように太った、おそるべきオバサンでした。それぞまさしく彼女にちがいないのです。あゝ夢去りぬ……。しかし僕は、過ぎにし日の、あの須磨の浜辺の景色だけは、いまでも美しかったと思います。

### (六) 傷心の巡業時代

そうこうするうちに、昭和十九年の学徒動員となり、四月には浜名の海兵団に入団、三ヵ月の訓練を受けた後、今度は予備学生として横須賀に廻され、お次は八丈島へ島流しという寸前に終戦となり危く一命をとりとめました。

終戦後は、喫茶店をやっていた両親の手伝いをしていましたが、翌二十一年八月、高田先生の劇団が浜松松竹へ来演の際、御挨拶に伺ったのがきっかけで、再び俳優としての道をたどることになるのですが、高田先生も「君は俳優が一番適してる、ここらでじっくり気を入れて、うんと苦勞してみるべきだよ」と激励して下さいました。

かくて待期(ママ)するうちに、昭和二十二年十二月、高田先生から、京都へ来いとのお手紙を頂き、その日の夜行で勇躍京都へ立ちましたが、当時下加茂撮影所はなかなか入社がむずかしく、久し振りにお逢いした大曾根辰夫監督も「いまは駄目だが、僕に任してくれ、きっと君を一人前の役者にするよう努力してやるから」と云われ、一先ず高田浩吉劇団へ籍を置くことゝなりました。

それからは、来る日も来る日も旅興行の明け暮れでした。先生の彌次私の喜多で、北の

涯て、南の涯てまで打って廻ったあの頃の辛さ、わびしさ。幾度止めて帰ろうと思ったことでしょう。そうした或る日、中国福山のさる劇場で、三船敏郎君の第一回作品「銀嶺の果て」を見るに及び、現在の生活に対する不満と同時にこうしちゃおられないぞという気分燃え立ち、更に名古屋で「酔いどれ天使」を見てからは、もう一時もじっとしていられなくなりました。自分がいまやってることは、果して演技といえるだろうかとの疑いに、激しく鞭うたれはじめたのです。

「先生、僕はこのまゝでは駄目になってしまいそうです、伸びたいのです。どうしても映画への野心を捨てきれません。どうか我儘をゆるして下さい」先生は黙ってうなずかれ、大曾根監督への手紙を書いて下さいました。

### (七) 映画へ突進

しかし、高田先生、大曾根監督のお引立てにもかかわらず、会社はまたしても私に冷たかったのです。第一のチャンスである「武装警官隊」を目の前に見ながら、引き下らねばなりません。私はもどえる心を抱いて、一人、高田先生の家の一室にこもって、次の機会を待ちました。しかし、不幸にして、スタジオ内部の政策は、更に「陽気な街」に予定されながら、またしても私を蹴落してしまっただけです。

こゝに至って、劇団時代に身につけたねばりと、生来の負けじ魂が、ぐんと頭をもち上げてきました。激しい映画への執着に、改めてめざめたのです。それを助長させ、励まして下さったのは大曾根監督と、はるか旅の空からの高田先生の叱咤の声でした。

「くじけるな、あせるな、地道に行け、勉強しろ、あくまでもやりぬくのだ！」

私は甘い考えを捨て、捨身で映画へ突進しようと覚悟しました。そして遂に二十三年十二月、下加茂の大部屋に席を連ねました。スターとしての出発の夢をきっぱりと断ち切り実力だけを頼りに、厳しく自分を鍛え直そうという心からでした。

### (八) 初出演あれこれ

第一回の出演は、大曾根監督作品「遊侠の群れ」に清瀧の佐助の役をいただきました。高田先生も久方振りに出演され、心強き限りでした。芸名は改めて鶴田浩二とつけていただきました。映画的演技に不馴れのため、しどろもどろでしたが、それでも熱心を認められたか、続く「フランチェスカの鐘」では、一躍主役に抜擢されました。

それと決った時は、うれしいよりは不安の方が大きく、緊張に身のすくむ思いでした。何しろ、メイクアップさえ満足には出来ない有様でしたが、いまこそ念願が叶ったのですから、全身全霊を打ち込んで勉強し、研究しました。水島道太郎さんの御親切な御指導の数々は、どんなに有難くうれしかったことか。

「君の顔は僕と同じで相当バタ臭いから、役柄からも、汚した方がいゝだろう」とおっしゃって、顎に傷をつくって下さったのも水島さんでした。このために、演技までが随分引き立ってきたのです。いよいよ撮影が始りましたが、思いの外にスムーズに運び、演技にも自信が持てるようになり、ほっとしてくると同時に、

「なんだ、映画の演技って、こんなものか。大丈夫やれるじゃないか」

というおごりが、生意気にも私の気分を横着にさせ、或る日仕事が了ってからの帰途、ついスタンドバーに入り込み、ハイボールのグラスを重ねてしまいました。「遊侠の群れ」以来二ヵ月にわたる禁酒生活は忽ち崩れ、ぐでんぐでんになるまで、徹底的に酔いつぶれてしまいました。気持のゆるみとは恐しいものです。「しまった！」と気がついた時はもう夜ふけていました。明日の仕事への不安が一時にむら雲のようにわき上り、下宿へ帰ってからも、あせればあせる程眠れません。

翌日は不眠と宿酔いでズキズキ痛む頭を抱えて、セットに入りました。私はすっかり自信を失っていました。運悪く、その日は肝じんの長台詞がある日でした。案の定、何度やり直しても駄目なのです。NG続出、とうとうスタッフの一人一人にいちいち頭を下げて一寸休ませてもらい、その間に水道の蛇口をひねって頭から水をかぶり、やっとどうにかその日の撮影を続けましたが、その辛かったこと。自責の念で頭はいっぱいでした。

大曾根監督は、何も彼も見抜いておられたのですが、仕事がすんでからたゞ一こと、「早く帰って寝るんだよ」とおっしゃっただけ。でも、あたゝかいその一言が、私の肝に深く深く反省の一打ちとなってしみわたったことでした。それ以来、一本の映画が仕上るまでは、絶対に禁酒を厳守しています。

後で試写を見ると、その日の顔が一番醜く、勿論演技も駄目でした。すべての生活状態のよしあしが、カメラを通じてはっきり画面に写し出されることを知り、今更らのように、映画俳優というものの生活の厳しさを、つくづく考えさせられました。

「フランチエスカの鐘」といえばとても残念なことがあります。ラストに近い喧嘩場のシーンで、格闘しながら二階から下のホールへ落ちるところなど、あれ程の危険と情熱を冒して撮影したのに、カットされてしまいました。私としては、デビュー作品の最も派手な見せ場だけに、惜しいのです。大船で撮った「殺人鬼」でのラストの追っかけ<sup>1</sup>も、同じくカットされました。こうした場面は、何ととっても昔とったる何とやらで、中学時代の実力<sup>1</sup>にモノを云わせ、私の得意なところ<sup>1</sup>です。しかしこれは、自慢になるような、ならないような……。

### (九) 映画道まっしぐら

その後ひき続き、どんどん出演させていたゞいていますが、演技のむずかしさ、芸術への探求は、一作毎にますます深くきびしくなっています。「殺人鬼」「バラはなぜ紅い」「恋愛三羽鳥」「影法師」「榮光への道」「危険な年齢」「春の潮」「接吻第一號」「大学の虎」まだまだ、どれ一つ満足なものは得られませんでした。

「今迄自分達はお前の考える通りにさせてきた、苦しみ悩んでいる時も、黙って見てきた、ぶつかり、傷ついてゆくことでお前が自分自身で何かを掴むことを信じ、侍っていたのだ。そして、いまやっとうどうやら軌道に乗ってきたようだ、しかし、私もお母さんも、いまこそ心から心配している。お前にとっての本当の困難はこれからなのだ」

父からの手紙が、私の机の上にあります。私は本当に男泣きしました。そうです、私はこれからの道を、今までにも増して努力し、踏み分けて行かねばなりません。思えば、両

<sup>1</sup> 数寄屋橋からドブ川に飛び込んで逃げる場面を撮ったようだがこの事か？

親にしろ、大曾根、高田両先生にしろ、いつも無言の鞭で私を打ち続けて下さいました。私もまた無言でそれにむくいねばなりません。映画の上こそ私の感謝のことばが現わされるのです。 (おわり)